

明治三陸地震津波「被害見聞録」摘記

○救助米

被災地でまず困難をきわめたのは食料の確保だった。すべて流されただけに被害の翌日から飢餓が心配された。幸い宮古町が助かったため、急を救うことができた。22日には県が函館から買い入れた米が船で宮古港に入港、飢えから救われた。

○土蔵も流出

田老町は裕福な村で、生計の度も進み土蔵も堅固なものが多かったが、それらも津波に流された。実に悲惨な状況だった。

○出漁者の断腸

乙部では4人乗りの流し網船が15隻出漁していた。陸のほうから汽車でも走るような音がした。波は穏やかだったが、とにたく網を上げて帰った。途中、大波に3回出会い、同時に流木がおびただしく浮かんでいるので津波だと直感した。波が高くて岸に近づけないため、沖に待機し一夜を過ごした。その夜、村にはひとつの明かりもなかった。救いを求める声がしても暗夜のため近寄れず手の施しようもなかった。翌朝になってみると全村1戸もなく流され、その姿に断腸の思いでみんな涙にむせんだ。

○下摂待の惨禍

下摂待地区では10世帯ながら27頭の牛を飼っていたが、この津波のため全頭が死に、地区民48人のうち助かったのは17人にすぎなかった。

○扇田仮村長の功

田老の財産家である扇田氏は、津波にさらわれ体は材木にはさまれて海を漂っていた。2回目の波で材木がゆるみ、3回目の波で沖に流され岩に取りついて助かった。一家10人のうち1人だけ助かった。全身を負傷したにもかかわらず、村長不在中の代理を命ぜられて生存者の救護に非常に力を尽くした。

○鳥居家の打撃

16万円余の屈指の財産を有していた富豪家鳥居伝右エ門は手広く漁業を営んでいた。この津波で家や蔵すべて洗い流されただけでなく、一家全滅の不幸となった。田老ばかりでなく、宮古までも鳥居家の滅亡は大きな間接損害を与えた。

—「風俗画報臨時増刊第118号 大海嘯被害録」(1896(明治29)年7月10日 東陽堂発行)から引用

*「被害見聞録」摘記として、『田老町誌第1集 防災の町』(1971年・田老町教育委員会発行)に原文・旧字体で掲載、後に「田老生誕100周年記念誌」(1990年・田老町発行)に新字体に変換して掲載。本コンテンツでは「100周年記念誌」を転載しました。